

食肉におけるラテンアメリカのポジションについて

稲田 英知

「ラテンアメリカとお肉」というと、唐突感があるかもしれない。しかしその食材は非常に身近なもので、日本人の多くは日々様々なシーンで美味しく頂いているのである。ここでは、畜産物という側面からラテンアメリカがいかに世界的な重責を果たしているかを述べていきたい。

現在、食肉や水産を中心に動物性タンパク質の世界的需要は拡大している。中でも食肉の消費拡大のスピードは年を追うごとに加速しており、その需要への対応は世界的な課題と言っても過言ではない。そのような状況下で、ラテンアメリカの担う役割は非常に大きなものと言え、その存在感は日々高まっている。畜種別に見ると、牛肉ではブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、豚肉ではブラジル、メキシコ、チリ、鶏肉ではブラジルといった具合に名前が挙がる。これらの国々が世界に畜産物を輸出しており、その供給責任を果たしていると言える。その中でもとりわけブラジルの存在がひときわ目立つ。ブラジルは、2000年代前半に世界的に高病原性鳥インフルエンザが大流行した際に、家禽類の清浄国として世界的に非加熱の鶏肉を輸入国の制約を受けることなく大量に供給できる世界で唯一の国となった。それまでブラジルとシェアを3分していた中国とタイで立て続けに鳥インフルエンザが発生したことがブラジルの存在を際立たせた。またブラジルは牛肉や豚肉においても、2000年代初頭までは長く口蹄疫の影響もあり輸出の制限がかかっていたが、2006年が口蹄疫の最終発生となり、その後世界的な需要が拡大すると共に世界的なシェアを高めた。その結果、グローバルでのブラジルの畜産物の存在が非常に大きいと言える。

ブラジルの他にも、アルゼンチンをはじめとしてチリやメキシコ、そしてウルグアイにおいてもその特色ある畜産物は、世界の拡大する需要に対応すると共にその品質においてグローバル市場で高く評価されていると言える。

世界的な需要増について

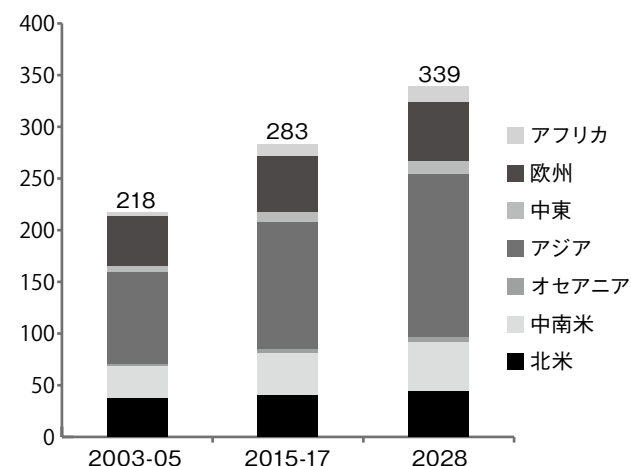
ラテンアメリカ各国のそれぞれ特色ある畜産物への個別的な言及は後程行うとして、まずは畜産物をめぐるグローバル環境を整理したい。

2000年以降、畜産物の需要は右肩上がりであり、2003～05年平均の消費量は約2億18百万トンとなっており、2015～17年平均では2億83百万トンと約30%の伸長している¹。エリア別では、アジアの伸びが顕著で約180%の伸びとなっている。これは言うまでもなく、アジア全体が高い経済成長に伴って所得が増加したことで動物性たんぱく質の消費量が増加したためである。中でも中国においては、人口約14億人から富裕層の割合が増加していることが影響している。中国は2013年から畜産物の純輸入国となっているのだが、中でも豚肉の需要が強く2018年ベースで年間5,400万トンが消費されている。これはもちろん世界最大の消費規模だが、鶏肉においても2018年ベースで約1,200万トンと世界最大の消費である。牛肉は2018年ベースで約800万トンとまだ低水準だが、中国人のライフスタイルの変化に伴い伸長率は高く推移している。また近年発生したアフリカ豚コレラ（ASF）の影響から、中国における豚肉の需給バランスは大きく傾いており、他の畜種への消費に止まらず、世界的な畜産物の需給バランスに変化が起きようとしている。

また中国以外に目をむけると、タイやベトナム、

図1：肉類の消費量見通し

(単位：百万トン)



出所：農林水産政策研究所「世界の食料需給の動向と中長期的な見通し」

フィリピンといったアセアン諸国でも畜産物の消費は伸びている²。

ちなみに世界の消費という点では、この10年で約30%の伸長を見せ、これからの10年でさらに約20%伸びると言われている。

ラテンアメリカの役割

このように右肩上がり伸びる消費に対し、供給能力を持つ国は限られる。牛肉ではオーストラリア、米国、インド、そしてラテンアメリカであるブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイになる。この中で輸出量から輸入量を差し引いた上で純粋な輸出国となるのは、オーストラリアにインド、そしてブラジルとウルグアイではないか。オーストラリアは近年その干ばつに悩まされ全体の飼育頭数は減少傾向にある。インドは2018年約150万トン輸出しており、その輸出量は米国やオーストラリアに匹敵する能力と言える。特徴としては輸出のほとんどは水牛肉と言われており、ブラジルやオーストラリアに比べ安価で競争力があり、脂肪の少なさやハラール対応が強みで牛肉の購買力が低い国にも輸出している。このような勢力図の中で、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイは着実に輸出量を高めている。干ばつ等の影響は受けてはいるが、その4ヶ国での牛肉輸出のシェアは2018年で30%に上る。

豚肉に目を移すと、その輸出能力という点では、米国とカナダである北米、そしてデンマークを中心としたEUに強いものがある。特に米国の生産数量は近年増加傾向にあり、その供給能力は伸びている。その3ヶ国を除いては、メキシコ、ブラジル、そし

てチリが挙げられる。メキシコは米国産豚肉の最大の輸出先だが、日本をはじめとしたアジアに輸出をしている。チリにおいても輸出量が多くは決して多くはないが、日本向けに高品質の豚肉を供給している。アンデス山脈の肥沃な雪解け水が肉質にも良い影響を与えているのか、その評価は高い。ブラジルは中国向けに高いシェアを持っている。その供給能力と言えば、EUや北米に次ぐポジションと言えよう。

鶏肉に関しては、冒頭述べたようにブラジルが圧倒的な供給量で世界的にシェアを占めている。

このようにラテンアメリカの存在がこの10年の間に畜産物で高まったことの背景に、需要増とその供給能力や疾病だけでなく、彼らの世界的な市場を把握したマーケティング能力とコスト競争力があったと言えるのではないか。

ブラジルにおいては、早くから日本市場に参入し、当時日本向けシェアの高かった中国やタイについて、品質や規格等が厳しい日本向け市場へ対応した。アルゼンチンのビーフは、その食文化と相まって世界的なブランドと言える。これは、様々な国々への供給に自分たちのポジショニングをしっかりとすることが要因ではないか。

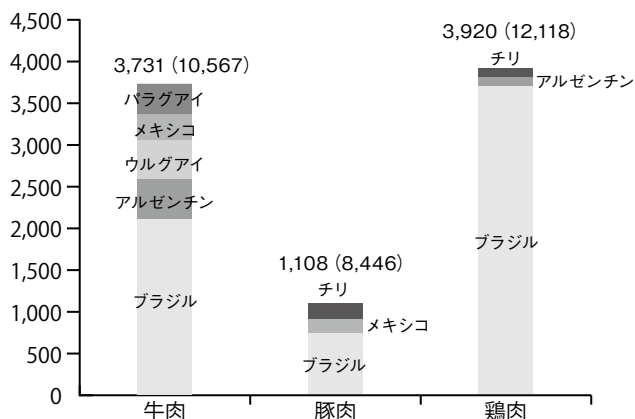
ちなみに日本向けの食肉規格は非常に厳しい。毛や骨といったその生物由来のものはもちろん、異物や規格というものに非常に厳格である。世界的に見てもこれほどの厳格さは異質である。このような厳しい基準に対して、対応してくれている関係者には感謝するばかりだ。

話が逸れてしまったが、このような市場とマッチングしたマーケティングの成果を背景に、ラテンアメリカンの存在は高まり、その供給責任も世界の動物性たんぱく質への対応ということで重たくなってきていると言える。

特色ある国 ―ウルグアイ

ラテンアメリカの中でも人口が約350万人と決して大きいとは言えない国でありながらも、牛肉輸出数量で10番以内に挙げられるのがウルグアイである。ウルグアイはラテンアメリカの中でも数少ない温暖な気候で、肥沃な牧草に恵まれている。そして経度は約30度辺りに位置している。これは同じ食肉輸出国であるオーストラリアのニューサウスウェールズ州と同じような経度と言える。ニューサウスウェールズ州も肥沃な牧草があり、高品質のグラス

図2：2018年主なラテンアメリカの各畜種別輸出数量（単位：百万トン）
（）内は各畜種の輸出全体数量



出所：国の消費量 USDA “Livestock and Poultry: World Markets and Trade”
* ラテンアメリカの数量は表に記載のある肉の合算

フェッドビーフを供給している。グラスフェッドビーフは、そのオメガ3の含有量から近年健康志向の人々から支持を受け、ブランド化が進んでいる。そしてウルグアイでは肉質で高い評価を得ている英国種が多く飼養されていることもあり、その付加価値は高まる。このような特色ある牧草牛を供給できるエリアは世界中で限られている。また、ウルグアイは国として牛肉を主要産業と位置付けており、トレサビリティが構築されており、その安全面を含め強みと言える。

ウルグアイの生産量は2018年575千tで世界では10位以下のポジションだが、輸出数量で見れば、466千tで8番目のポジションとなっている。輸出量の内訳としては、中国とEUが主な輸出先となっている。需要が拡大するアジアでの実績があり、需要は今後高まることが予想され、ウルグアイの存在価値は高まるものと思われる。

そのようなウルグアイに拠点を置く Breeders & Packers Uruguay S.A 社が2017年にニッポンハムグループに入った。当社は2006年に設立され、単体の工場としてはウルグアイにおいて最大規模で、設備も最新鋭を誇る。その高品質の牛肉は世界で評価されており、ニッポンハムグループの重要な資産であると言える。

このようなウルグアイも近年干ばつが頻発している。その結果、生体の仕入れコストが高騰しており、事業運営も厳しい局面を迎えた。そのような中でも事業改革を推進し、一定の成果を得ている。今後、

世界でのウルグアイ産牛肉の市場認知が進み、そのブランド価値が向上すると共に、弊社のウルグアイでの事業が飛躍すると期待している。

今後のラテンアメリカに期待すること

ラテンアメリカに原料として畜産物の供給力と今後のポテンシャルについて述べてきた。これは周知のとおりであり、皆が納得することであろう。今後、畜産物の供給という点でその役割の重要性は増すであろう。このように畜産物の供給と併せて豊かなラテンアメリカの食文化も是非日本を含め世界にもっと広めてほしいと考える。私自身の狭い知識の中でも、ラテンアメリカと多様な食文化を結び付けるのは容易である。メキシコではタコス、アルゼンチンやパラグアイでのアサード、ブラジルを中心に食されるシュラスコやフェイジョアード等多様な食肉を楽しむことができる料理がラテンアメリカにはたくさんある。私が知らないだけでもっと多様で魅力的な料理がラテンアメリカには溢れているだろう。単なる食肉輸出だけでなく、今後このような多様な食文化を世界に発信してほしい。そうすれば、食文化を通してラテンアメリカの国々への理解が進むだろう。先述したアルゼンチンの牛肉とアサードに代表される食文化がいい例だと考える。その土地の高品質の食材を使用したその土地ならではの料理方法で楽しむ。その両輪でラテンアメリカに触れられる機会が今後増えてほしい。そして自分自身もそれを身近で楽しめるようになりたい。安定した食肉の調達



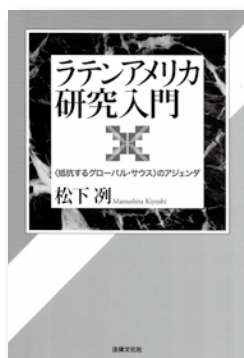
2017年にニッポンハムグループとなった Breeders & Packers Uruguay S.A 社

先としてだけでなく、多様な食文化とリンクさせて楽しむことができれば、それはラテンアメリカ諸国にとっても、我々のような供給を受ける国の人間にとってもなんと幸せなことではないかと考える。

- 1 農林水産政策研究所『世界の食料需給の動向と中長期的な見通し』
- 2 各国の消費量 USDA（米国農務省）
“Livestock and Poultry: World Markets and Trade”

（いなだ えいち 日本ハム（株）広報 IR 部マネージャー）

ラテンアメリカ参考図書案内



『ラテンアメリカ研究入門 ＜抵抗するグローバル・サウス＞のアジェンダ』

松下 洸 法律文化社 2019年12月 231頁 2,000円＋税 ISBN978-4-589-0404-3

20世紀にラテンアメリカを席卷した新自由主義型グローバル化が及ぼした社会的、政治的、経済的、思想的影響を再考し、21世紀に入ってポスト新自由主義を模索するラテンアメリカで起きている問題群を挙げ、トランプ政権の誕生によって生じた新たな課題、「左派」政権の挫折とポスト・トランプ時代に向けたラテンアメリカのグローバルな民主的世界秩序構想に向ける視点と課題について、著者（立命館大学名誉教授）なりの考えを述べている。

21世紀の課題として、農村社会の変容、インフォーマルセクターの拡大による都市社会の分断、「左派」政権の「挫折」と教訓、現代のポピュリズム、国家と社会を蝕む北米のリージョナリズムと安全保障、麻薬カルテルや移民問題などの「新自由主義」下での暴力と歪み、NAFTAに翻弄されたメキシコ社会とポストNAFTAに向けた再構築、ブラジル労働者党政権の挑戦と挫折、多極化する世界秩序の中でのラテンアメリカ、BRICSの拡大、リージョナルなガヴァナンス構想と地域協力など、現代のラテンアメリカで注視すべき諸テーマを広く論じた労作。

（桜井 敏浩）



『ラテンアメリカの連帯経済ーコモン・グッドの再生をめざして』

幡谷 則子編著 SUP 上智大学出版発行・ぎょうせい発売
2019年10月 354頁 2,500円＋税 ISBN978-4-324-10623-5

新自由主義的思想でこれまでの市場中心的な経済開発モデルが、失業、非正規雇用、貧困格差、環境破壊などの問題を引き起こしているが、これに対抗するにラテンアメリカの人々の間でローカルなレベルで実践してきた連帯経済が公正で持続可能な社会の担い手になり得るか、それを育ててきた民衆運動の歴史と実践の個別事例を比較検討することでオルタナティブになり得るかの可能性を探ろうとする研究論集。

ラテンアメリカにおける実践事例として、メキシコのチアパス州でのコーヒーのフェアトレード、エクアドルのアンデス高地サリナス教区における農牧産品等の生産、販売などでの連帯経済、ペルーおよびボリビア都市部の民衆の間でのコミュニティ菜園や民芸品フェアトレード等の連帯経済活動、コロンビアにおける産消連携をめざす協同組合運動、ブラジルでの労働組合と協同組合活動の連帯、アルゼンチンの社会保障関連連帯経済組織を紹介しており、終章でラテンアメリカの連帯経済の特性を纏め、どこまでコモン・グッドの充足に資するかを自問し、オルタナティブとしての連帯経済が抱える問題点を指摘した上で、日本社会においても考える上で学ぶべきことがあると結んでいる。6人のラテンアメリカ地域研究者による示唆に富んだ論集。

（桜井 敏浩）